

週刊 座、グレート・リーダーズ通信

『インド私録-思い切り取り組んだこの 50 年-』 No.15

今週のキーワード! ヒンドゥー至上主義
過激派に踊らないインド

武藤氏によれば、インド人にとって宗教は生活そのものであり、人々は宗教によってアイデンティティーを確立しています。そのため、異教徒から自分たちの文化や権益が侵害されたと考えられた場合には過敏に反応することになります。人口の 8 割を占めるヒンドゥー教徒の中には、「インドの国民はヒンドゥー主義に基づいて生きるべきだ」と主張する、民族奉仕団(RSS)といったヒンドゥー・ナショナリズムを唱えるヒンドゥー至上主義勢力も存在し、たびたび異教徒を排斥するという動きを見せます。

『インド私録』にその激しさが記述されている 1992 年のボンベイでの暴動も、北インドのアヨーディアにあるイスラム礼拝堂を破壊し、ヒンドゥー寺院を建立しようとしたヒンドゥー至上主義者の行動に端を発します。それにイスラム教徒が危機感を抱き暴徒化、それがヒンドゥー教徒の報復を呼んで多数の死者が出る暴動となったのです。近年では 2008 年のオリッサ、カルナタカ州でのキリスト教徒襲撃、2009 年のカルナタカ州のパブで飲酒していた女性への制裁などとい

った事件も起こしています。

今後ボンベイでの暴動やこうした過激な行動が強まることはあるのでしょうか。

その点武藤氏は、「インドの未来について、こと宗教に関するかぎり、そんなに悲観的ではない」と言います。その理由として、インドが、政治はいかなる宗教の干渉も受けず、どのような宗教に対しても中立であるというセキュラリズム(世俗主義)を国是としてしていることを挙げます。

しかも、宗教が生活そのものであるインドにあって、そのセキュラリズムは「宗教を抑えつけようというのではなく、全ての宗教を並立的に共存させている」ため、宗教人口の数にかかわらず、政治や経済に関する限り、どの宗教もほぼ同等の発言権を持つようになっているからだと言います。

豆話

映画になった騒乱『ボンベイ』

ところで、武藤氏が実際に体験した 1992 年のボンベイの騒乱は、1995 年公開の『ボンベイ』という映画にもなっています。監督は今年 9 月にイタリアで開催されたヴェネチア映画祭で第 6 回監督ばんざい賞を受賞したインドのマニ・ラトラム監督です。『ボンベイ』は宗教の違

いを超えて結ばれたヒンドゥー教徒とイスラム教徒の夫妻を軸に 1992 年の騒乱を描いています。互いに殺し合う暴動の最後に民衆自らが武器を捨て平和を選んでいくというラストには、マニ・ラトラム監督の「多くのインド人は、平和に仲良くやっていきたいと思っている。もはや宗教の問題ではなく、政治問題なのだ。少数の過激派に対抗するためにこの映画を作った」という思いが反映されています。その過激派からは内容の変更など無茶な要求があったものの、拒否。映画はヒットし、国内外で多数の賞を受賞しています。



『ボンベイ』の日本公開は 1998 年。写真は公開時のポスター。主演:マニーシャ・コイララ、アヴィランド・スワミ、監督:マニ・ラトラム、音楽:A.R.ラフマーン。DVD が出ています。

第 17 回放送は、あっ
今晚です。

